新撰猿蓑玖波集 上

帝國圖書館藏
特別閲覧
ヘ 特 5
1964
1

1964
1

新撰猿蓑玖波集

山崎の宗祗大苑玖波乃一集ハ俳諧
ハ俳諧ハ和歌ハ和歌ハ花咲の貞徳
ハ貞徳ハ文貨をきらひ俳諧ハ世
新増大法くハ集と題し風流のつとめ
ハ連天文ハ宗寛永の比ハ延宝ハ
歌道流乃始祖雅波ハ梅翁ハ花や
なる道ハ神ハ遊ハ俗香都鄙ハ充滿すされハ
宴ハ談林風起る支ハ貞享元禄ハ及て

西崖芭蕉法德あると大ふ趣と意寸此時なりと
詞の新句をもまして安永乃今を時と郷れ
流行はあれと発句附句とも、詠句のことと
なる所謂正風新是也尚時東武乃流行者
點取の附句を好むことと天文を天和の時
とにくらふき八格調齟齬なる事又かくれを
宗温とはすめ其、対の人く今世の風俗なり
ちるもしあるべつせのため一二を挙く

女夫おろ〳〵やあ武蔵ゆ
除ふをまさうちとけぬ中垂と　宗温

やとあ義浦めとて歩行きく
ゐとをとをなの乃弦ほとむ琴　守武

わ〳〵つたて多くなつまる
印北又後い宵宮とあるめし　貞徳

香のくゆりも幽をふるハうゑ
侍人ハきもせぬ懸ふ取ハ又く　李吟

火打の石れ床ふ起ふ
登不術き黄ましひとをと女　梅翁

おさおいを変乃乃乃秋も更
夜交まりハ月出てあろ

此句くしの句もて行屋巻中
ゆき稀〳〵ゆて人家殘るもとなきるも
貞享元禄乃比ハ今ふ狂同〳〵趣れ仕意
多〳〵

文ふ今ゑ多まるとなる筏川　西崔
小宮と二夜ふ尺くる編妻

人多き財夫所ゑ〳〵紅　丶
下女の泣生す浪れ塗笠

星ひ〳〵尺〳〵二十八日
ゆくるきハ孫ふ軍れ大事之　芭蕉

細き節ゑわ意ひ乃尺ゑ
物れもふ方ふ拙くとせつうきて　丶
誠ゑ夜の節ふさくる計ゑし
揚屋の鼾矣ふ雪乃間　沾徳

牛馬の繋きなすゑふ添ぬる
ちいさい竹と咲を低塚　来山

うとてやな揚とれハ咲る亀
月の徐ハものたゝぬ夜　才麿

乃さゑゑも紬揚ける玉簪
行燈きゑて咲る浪人　嵐雪

元をあて母の角けさも氣泡
出されてゐる盜人乃歌　其角

あさましくいと小侍いやる
年乃豆蜜拌の核し為ちて丶

什外いかとも者〳〵未熟れ人ハ只恋と乃
元んと一句の仕ぞかんさやる友おの〳〵ら俳会の
者增なるもつくえ仕るるや句乃姿ハしつ生
歌とも連歌四道ハ附方を中として歩越つ今ハ
一巻の捶拐を去寒ふ学ハ仕ら〳〵ハ行の
いすれ〳〵ふ和るるやれあ〳〵やさるハ先師批評の
巻〳〵ら褒賞乃ものハ附句と集め拉已の
拙き評の句をも混して全部十巻とふし
初学附合ふもも仕けるたよりとす篇羽根ハ
二岑れ去〳〵るをとくまむ弟水上と稼すふ
似〳〵まて大英歌波寄るけくハふと幸行る
先哲乃標題ふおらハ毛筋ハ足さる事をもそ
猿仕くいと号すくまねの浅ますと申め答め
きまひ拉穴賢賢

荏土神田玉池　一陽井素外著

安永七年戊戌冬十一月

猿蓑玖波集　巻第一

春誹諧連歌

沾連帰り家と慈護の富士が
男子とおもふえ日の長　栗堂
時そ自然の陽氣活達
肩衣をとるこの草書ぬ筆たしめ　吳龍
世話とうしろく配る母　祝
万歳の来て考え語る餘計　公曳

さもない年も春て若代て
才義ゝ[illegible]と閑女ハ矣ひきえ　紀亮

去年の形てを正月の新
菌とりの辻宝引をむき出く　素羅

坊主ハ夜も[illegible]ふむつ[illegible]
宝引の人数とりくる湯へ客　寛之

夕暮乃旅やゝを[illegible]ふつの妻
母の[illegible]中へゆくまるたゝみ子　素角

二代目ハ禅家も[illegible]て高麦
笑さやうな義ゝ門妻　津宜

松ほのゝくとき〻む　番　祢宜
左義長ゝ焼ゝ[illegible]ゝ膝　沢　羽州　百童

猫をたゝいて二度目ハ
薮入を泊まも母乃いそく也　素竹

駕籠かゝのたゝいて上ゝる才嫁
自慢年ゝ遅い薮入　青芝

あゝ[illegible]雨も中ゆる義の義
左おろしよき春乃霞ん　素芳

文雅の女れ只二人佐生
春色の抑かゝやき角田川　枝静

馬場と話せる社 袁遠比 梅郊
梅咲て墓場より見る里ちらし
大膳亮の国ハみちのく
迷やうに行ぬも梅と答ふる 苔雨
隅田今戸晋子の宋とたちら
皮干す中小樵多の梅ら香 素明
連をくるる藪の中のうと
梅屋敷太へとと食ひ
今引ての氣と遣ふ春色 操舟
咲も一朝吹し畑のうめ 龍昇

物もくの木も中ひさめ 袁玉
うらひさ乃声梅ゆか京をし
春のはれを脱る援 陰
泥田かへして痒さうなる 栗堂
平井へもきさくの出ぬ月
きさらしくく水の小田ハ芹 軽舟
俳るきハ行合乃て幾代踏
若いけハ野花うる蕣 扇里
女乃中もよくくゆる京
春の子ハ梅子静ふ去つる 呉仙

雅を上野と言れし土圭
相番の雲口ふ所なる素の面　素角
梅なりてさえ人の十マヌ
大几巾ふ弼あるる雨後の三筋　呉龍
恭平ふ事春乃世の中
空ふ几巾居主ハ童ア地ヌ踊ヌ　高岩 嘉水
ヌ捕の接ふ歩ふ坊ふ
雛祭伝所ヌ伯母の指号して　素琴
先生をも呼ぶ名の花
ふ版を伝接の小女乃出かりも　蒼雨

花の人なとそきちゝ紀の室
寺と武家たてと静ふ京乃町　呉朝
ふてハうれぬ酒屋も花の人　投静
奥のほへを芋の戸ハ素
井桂ハ七重ふ曲ヶて八重　貞知
傘ふの身も主かけ塀のもと
琴ハ遠言子接きゝ　呉仙
味噌を指うちふ四ヌ人田螺汁
けらゝさくと挟い別荘　著右

昔 重清の軒ちかき寺
二日後 雨ふる雨つく糸さくら　素芳

都かたちやうちの傍ハ信濃れと
下馬の桜の大やうなる　賈太

けれ月紀昌ふ月羅むき
梨の花桜の中に蓋めくり　麦登

蛇ハ呼ん蝶ハ蝶ハつく撲日影
京のよん花とうる海棠　花蓋

素通りをとん告めもたいこ持
山吹を評判の形茶屋　軽舟

上巻

産を出来て下されし方
桜芽吹をゆうねハさんとて一巴
自由のなるハ不自由なる佃の蜆　其葉
日の伸さとも濡ふハ思ハぬ
這出る這出ぬ蚕二むしろ　栗堂
反義性をめの續く夜　揺
疎るて妻と知るる春毎ふ
日ハ脆的ハなる千の昼下り
春ハ来ても殿の性急　寛羅

猿蓑玖波集　巻第二

夏誹諧連歌

半りと人う猪の下こ並いやう
拾ふ足ゆる母義のたどつま　貞知

四方ハ若葉ふ水色の空
なうハるて杜鵑きく吐月　格　吳朝

大路きるて志んと　拓　詰
法師の藝ノうち少かとき寺　京芳

上五

南ふくロふろけうけ
皆碎ふ心鍋と若るるか如ひとう　漢　素羅

古るるさすロのそやき引恵
者鍋か封ノるゆるくて　芭波

拾ふて出合うらの縄簾
かいと一ふ撃とたく　下谷　素月

ふもいよ〳〵時雨の滝
なりさうと若葉ふ京ハ山　龍昇

朝夕の神ふ拝れるお書机
古風な意千のするたちたれ　花城

むら〳〵帝都の殘る燈く　風舍
桐の木は花と捧ぐ咲よりも
風なき暑くふてゐぬに
芍藥は〳〵牡丹も花の肥り子　亀洞
くたへきせるて石の如く子坪
京つけは芍藥の下旱は葉の廣さ　羽及　素盈
ゑとり醒〳〵陶子の酒
腐儒者螢ゐとるゆゑとはし　慮得
嫁ゑ姑ゑ蛍殘れ笠
花蛍桂志まふ田のるもとり　梅郊

ちや雨雲も夏　掃　法
八九間投ると早苗よいとうち　笠畝
今朝掃除ちれは京紙たこ入
生碎ふる　牧も破ちて　素人
職人多く人あるき　町
生破の乳母か老き　印　地お　素琴
令をちり生〳〵京徒の軍配
恐ろしくか茂川の水さきまれて　常路
晩ふ茶やきも呑仲ろとて
藻刈舟泥亀ふる　俤　もの　如雷

月上のよゐも明いのゝとろゝ　栗堂
夏ゝろ〳〵　禁　冷天の花
ぢやんと四角ゝ掃出しさゝ
冷天の湯屋ゝ老人只ひとり　吐鳳
花の地ゝ花川を縁さき
日の盛ゝくる下ゝ添乳して　素琴
ゆらゝもいゝ戸櫓外
日ゝろゝ嵯ゝ暫女の投込田　久哉　雀舟
立てゝゝる中に夏の夜の粗
いゝめゝく扇とはゝ古戦場　扇里

禁ゝる護戸の烟も夏のゝ
百日紅ゝ　さゝる　雨方　李克
お出しのゝいゝ芝居もよゝ悪し
大夕ゝゝ中ゝ入て居れハさゝて　吐鳳
千金の夏とゝ〳〵し四条川
ゝを立なく除六月の雨　枝静
振巴かゝ　辭ハさめ家味
夏河の京ゝ茶屋ゝ茶屋　龍昇
庭ゝ涼ゝ張りし帰と伯母
告めのゝそい夏の萩歩行　素盈

一むさ　いくの人ぬ涼
世を捨ぬ家と感ずるハ夏の蛍　貞知

うゐいと考ふる　大坂の声
供舟の乃ん家ハおしまてうう　壱波

舟ハのるうりアるゝ桑しゝ
菊川岸の客つも一抱ゝ蓋　賀重

五條通りも四条への人
夕涼ミ子ハほのくと天瓜粉　佐國

日の姫せきまハ生坂
金魚屋ハ泉水よりも浅い家　一巴

汐の満るも尺くる　孝行
去ろけぬハ心もとなき高楽瓜　笠歌

ゑまめても高楽つ
きハめて辛紀子瓜乃塩　丶

念佛と少しも膝行ハ之
昧の蓮ハ世へ生ハ心　寛雅

戯れのうち家のつくも医師也
三階乃眼かをきき淺香　南部芦皓

うんこるさく絶しを
仮対しなきれく丸田艸　天丸佐國

秋誹諧連歌

二三軒ロ々ち離れ宿をつま
今朝初秋の茶釜月より分　梅郊

暑さも秋の月代夕暮
一ふるひ袴尺竹のあやんと鳴り　吳朝

村雨の晴て暑さの秋もまし
梢ゝ山ハひゝゝゝしゝの声　枝葉

いつ咲らさし月の初つゆ
させ紙葉を菴の笑戸小立挟ゝ　梅郊

そゝ〻藤瓦のみと荒て秋
髪の毛の落いとゝ甲る女郎花　李克

月かそゝ秋の初風侵ぬ也
昼も小鼓や公家の萩　涼山

初秋やロ脚の涼き朝京条
川ゝ〻ハ風の穏をふくむ　寛羅

結めふ地の初霧ゝゝゝと
猪首ふさくゝの鶏頭の出来　吳龍

奇葉さかゆるとハやけと号縁
葉毎ふえ申る葉の分枝　素芹

老をええれとまめな禅門
うけてやる牡丹かえの地と葉し　栗堂

元を知る喜ハ白蓮花しき
積り起ると狗杞の実をふ　雅郊

地僧の隅子地をうひしき
糸瓜ともなるぬ蔓仲をこうし　慮得

秋さへ入る　踏き泥乃
刈こ[illegible]うたちく栗　畠　呑鳥

きのしをみて起る別荘
日の名ふ法ると夜明のかるを瓜　一巴

法しや法嶽精進の朝ハ高
比そ五条も夕　部乃汁　丸室

まる住つるぬ石山出ておく
ちんちりと[illegible]たるよ椎うもと　花蓑

漸[illegible]みあ薄をる月
故の事乃言れしも月　秋の虫　石童

尼をれ伽の女法原　庵
[illegible]猶して搜す衣形の虫の声　真岡 梳水

夜を元やとふるす油灯
厂の声扨みるなく久しふり　一巴

宿乃出うけ先の奥福寺
昼見れい廉しく然しい敷てなし　梅郎

山伏とおもへの秋の田刈時
廉ゆふ寂て行の川仮　婆石

庵前のくせ不歳し紀氣うけて
月はくやうるる　紙　壷　曳尾

今宵ハ懸とはなしと如地
寄おりき月なるなの戸をさして　下谷　素月

芦の穂乃只ほいやうと風寒し
月荻はくのふ陽　紙こく川　卜人

いつとても氣の美い義を
関元と桟敷の懸ふ呼上て　呉朝

せハしない月ふ孫うるれ
角力とり聲恵のない汁毒のかし　鞋丹

月見もとをとの見くぬ秋
相撲元聲義ふといひ出て　笠翁

心外の月をもぐとる疝乗拾
るをかへてほる方の自然墓歌　吐鳳

隠元和尚を送る　公叟

杉菅笠ハらゝ雲を合羽にして

徒然のあまり庵掃てゐる　叟尾

秋乃日人相をゝる人れ来て

此殘る月の斜も野分之　拔静

人雲をあす北濱乃秋

蕎子も塩杉うら乃赤蕎　花雪

庵乃之徐世ふをく菊見きて

茶花も縁くゝる金松の寥

咲る江戸菊い淋しき花てなし　梅寿

刀の柄小外弼次乃謎　岩槻　雀郎

実めいな中間を撰る菊うゝ

久保の秋とうゝれて初秋の月

多みちの岩れ立か弼るゝ　素琴

入口の巣れ中反圃乃

小坊之の絵くかつきゝ拔ゝゝ　如雷

あゝゝり彩氏の西月乃秋

一番船も海上乃富　花蓋

夜咄しゝ竹のうゝ屋うゝの答

ちやり国もお淋しゝの九月尽　令彩

猿蓑玖波集　巻第四

冬　誹諧連歌

宮をせぬ人の閑も寒さ　呉夕
棒　僧の京昨日初しぐれ　雅郎
お陣茶の花もちるあり
犬引のゆるる狩か雪をほす　花雪
はくさるの立りよ行る旭影
氷ふまくてあたまを野雪　正十五

まめてあらんれハなるぬ茶をせ
初霜ゆりさと咲すロロ市　笠政
ゆるぬ氣てアれハ廊の冬拾て
義　茶の花　御けもち　龍昇
一宗の本山元と名うまく
蕉　葉も尺ハ法もる　雪　盧得
うらくうなやうてもぬむ春空
木草ハ老てし茶の花さうり　如雷
ひのもはゆるせるる笠ハ居
ろ仙りりさく附よちく　眉山

蒼戸へとじて足をやすめ
主菊の咲日あらのむらく　其友

鴨の羽言ふ白紀羽霜
芦枯て材木義のたゝ義　花蓑

出むかへ喰ふる畑の茶屋
松明振てあらを切ぬけ　梅郭

吹さらせ麻布十畳
ぶなくれ蹄の弓多一合　牝旧

後徒ちゝ酒の引出す
初雪の降うよりとゆ羽織入　公佐

上十四

十能の柄われさ強きふ振むけハ
一番の碁乃うちふ大雪　涼山

碁おのはくく多ち形一ふく
今入れる徒を這子れ雪まろめ　丶

もとれハ序るふ女も調市も
雪の客次の賛やゝと自慢して　梅寿

少しハ曲る白髪の炭
雪亲ふ侍接のふ個あらふて　其兼

よりなりとにまけぬ雑陀ほ
冬花形足せめ花吹夜ゝと　慮得

孫〻しく土をふむ風彷徨
鰥ともいたむ漁村の大底なる　扇里
雪時雨日和も色ハるゝくて
出刃研く襟へ袖鰥の嘉　其孔
連中孔葉のるとまゝきを教ふ
明かり狸おんかうの後　雪江
何もかもよりと常とメ直し
二男ハ孔出る河豚汁　嘉水
氣ハ緣てゆくる妻の次亦
俗もたく中て考えゝ帆立貝　雀舟

上十五

もゝ落く時白換ゝ多羽の蓑
車ゝ出せゝ考ゝたゝれ牛　牝四
切弦ゝ燈け陸ゝも考ゝき
俤色さゝと俗に花散蕾　寛羅
酒の元家て北風を押す
年の市賣人買人もかけ流し　素與
俳ゝ石嫁の紅色大強き
ゝ考ゝ考ゝ琴の花久る　扇里
孫やゝくとうゝけても
大世日陸か内へハ記ゝか　ゝゝ　素大

猿蓑玖波集　巻第五

神祇誹諧連歌

燈もさとくく栄る朝起　亀文
元日の留守の家てゐる伊勢れ留守
雲も野山也ゐまるなるさま　杜谷
素通りか名所ゐて行伊勢同参
家うれしと立まいさせ合屏風　如雷
元八花薬か太くを　折

かるしけなさい出る乃秋　丸室
迂宮を孕て居師も建直し
思ひ出ハ臯月も振りき月　芦皓
餐膳の小　縄を拂ふ田扇
往来の人服よぐらむ物とうて　素登
田植女のゝし社家町人名統
白ひい香具花い織ての
服まくゝし神明祭の春りき　允升
晴天の言と世ゆる雲乃間
弘ハ砂地内外清浄　素芳

うろの風やをよく若人
さーぬきの業も清秋の水淺黄　栗堂

月もふけぬ山深の夜
神の灯ふきうごきさせる庵の声　梅郊

更闌かものくさを記人声
初の内祭の日のきさ　貞知

行年てあれハ行対とうろう客
雪亥の湯殿ゆ盤ゆ鯉　公曳

夕のけぬうちよ刺身へ西日影
祭ゑ手来て蓑をかて居　曳尾

相口の医者ふ居れた原居
殆きたらりて日待とろける　雀郎

風家とたられ夜ハ暫女吹
食ゝ日待の素言茶三石　九室

新ゑ往来子捉燈乃殺
年の夜と新兄女の素れた神禾　呉龍

男たうと新ゑ出指子
笹ふきの月封いちと左祢禾　其虹

今一孫ちりゆうとうい玄
社弘畑の薗もきを意一て　素玉

案内ハ先へ連こハまゝ　社
苔狩のふと凄くちる古やしろ　著存
うんこ多き玄末の猫　咲めろ
都　公けなりて家起　素つ社地　素人
山の姿川の流も年を経て
木立小くらき　橋　姫の文　呉朝
木〻美柴殿の蔭を兼てらも
結　摘ハ多る冬くるゝ　光　操毎
天地のにハかをそゝ　ちろ
波　ひふりう立津う　苔岳　例　李克

上十八

且那尺て禍伴を捜す九源
神洒上てうゝ井戸ゝ　涌言　其葉
一むゝるも玄ハ　ほらゝ
地祭の場へ隙の　ちらちる　花城
やくさいもなゝ年よをう
玄ハ　清こまゝ　代の武士ひろ　素山
所　玄へて　ゝさ月　午玄
神道者　神ゝまゝぬ　位　岳也　角麻
孫ゝさくはの　ゝい　頂　上
竈ゝひ声もかゝちもふハほいて　佐國

椿苑玖波集　巻第六

釈教誹諧連歌

浴衣より革のくつ内
一ツ帽子ぬぎ出ス　泳陀尼　栗堂

ひとやこの岸の旭ちもて
千躰佛の拝ム　自鼻　筋　素芹

阿弥陀ぬ　大洒の望
至佛元服　とよい天氣　岩槻　素云

立塔を　ゑがふ　ろの末　一女
秋のはも　常念仏のせりぬ　素　花城

世時　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ
天上天下　釈迦の　の　合　素角

十夜月　夜の村　ウ　ウ　ウ　ウ
うこうてゐ　めさかされぬ　石地蔵　花雪

おろ　ゑ　ちゐ　母　この　先　達
葉の　ゑ　咲　く　され　ー　六地蔵　如雷

跨　く　ま　い　拝　と　祝　ち　ち　ち
徐　借　ち　海　て　法　菩　薩　汗　を　拭　風舎

彼岸前ゝ空も定まる
天まる桜も人もちらぬと　佐國

久しゝふるまて生るゝ信徒
智恵院春の日新も静ちり　著存

医者ハ陰士る日暮秋風
東福寺ちゝぬもちの上と行　亀文

女人堂ハ夏ハ子孫をうけ口ろ
索麺の茹々る間を使果し　梅壽

寮の暑さと女堂て知る　玉園

蓮葉みそのの外ゝれぬ朝
大仏蓋ゝつまゝゝれハとめとゝし　栗堂

桔乃旭平京まる雲
奥の院風ゝなゝても肌寒き　亀文

大名の霊ゝしゝ石ゝ寺ゝて
山門寺く寺ゝ岩屋　笠女

竹町ゝゝ妓味を溝
ゝゝ柳陰な拾子の塔ゝ光　執舟

ゝゝ小ゝ行めけのゝ
泉ゝゝ無ゝる寺ハ寺もゝ　雅郊

[illegible]ふい[illegible]ふ夜よ入て雨
絶京の寺ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]て来道
挑灯の火て林外る竈の下
寺中の踏き門蕭て寿　芭彼
秋[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]寺[illegible]八人[illegible]も田[illegible]也　過橋
[illegible]
お寺[illegible]
きれぬ親子中　麻布素月
[illegible]
[illegible]へいひ主　不逸

上　代一

[illegible]ふ古ひの付し奇麗好　祝ゐ
蕎麦湯の賛える寺れ初重
物半のお江戸ハ[illegible]
所[illegible]の[illegible]所の泊　栗堂
昔[illegible]れ[illegible]て見れい世の来和
漁村の中ふ法の[illegible]　梅郊
神泉苑　水のあけほの
守敏より空海の[illegible]古め記て　芋路
庭の定り　早い六月
中[illegible]へ[illegible]　[illegible]

延くし寄ハ卯月の末牡丹
時宜さるふり上る袈裟　梅郊
出さるも　楊　亡　中
十念のとめ　和尚のちる葉
千年ふるふ樹の下石の上
滝を清んてはるく侍
はるへよ上るせ玉の坂
老僧の捉てもひらき蔓　紅葉　其友
ころよく人日見法るさ蔓
立流るさ新　侍の書　曳尾

上巻

年号も人よ書せ封し令
大工ふ殘る僧の遺云　声波
岸ふ立せて彩む侍　松
姿さくとして似合しき僧の眉　亀文
心ろ〻のたける十月
納衣坊掃ゥ如くふ角剃して、
まる風を仁ゝ
本因坊の　細　むりも看給時
先つ治ま　之　膝　令浦
勤学の向ふ腕　北朝の時代
腕押も山法師　貫太

今小法師の
万年砌尼の
日と芋しうの舟乃の穀問屋
小比丘尼の名をゆて吹出す　公曳
ゆこともせぬ親子久才
修験者の弟拍をとやる　狐　付丶
客うあるやら汲かへる　あ
梵論二人尺うむ仏師の庭琴て　奥中村　素明
ゆるも面庄屋を胡乱ふ打寄し
地理ゑ要しき梵論の陰拍　芝　永

上七三

業の中小業生しさうの茶を運
古風な虚言を洗る田國　盈斜
かゝる風小出るも巖の胡　氷
百日行の狂ひ足とり　其虹
老人といふ附子村　色
堅法花弥陀の利剃もたくハこそ　素云
振旦の対ち二度三度切麦ふ
他宗ハ他人　池上の町　蒼雨
臼乃井ゆ伸とする犬
禁持ゑ元ゆて門をゆる行　素芹

茶碗月とよ岩ゐ板の間れ秋
擂方ゝ降ゆ笑ふ人ハかし　虎角

日も一色　柳の枝不連ゐ
春なれや西形ふ月も　東山下谷　素月

昔ゝ壱ゝてをき恋学者
発心とまて　寄きハめる　来遊

公事宿ハうしろ向余数二階
往来やゝうふ自賊謁よむ人　呈詠

五月ゝゝ九月ハ余寝苦いやう
俄ゝ涼の大般若ぬき　麻布素月

起よとそいくゝ一間ハ掃ちきり
夜明ゝ夏書物凄い後家　梅郊

別て拵てもやゝぬ大屋宗
拶ゝの水ゝ注けるぬの先　杜谷

大茶ゝの雑司谷　柳
極ゝハ居風呂桶ゝ首ゝゝ　牧之

遠じいハせゝ
細舟の形ゝ乞ゝ弁の洒
ゝゝ　寛孫

半百の茶ゝ
矣ゝハ猪牙ゝ茶ゝ人
殊叔ゝ上　栗堂

是悲哉成りし老の馬上郎
然 膳ハ不[illegible]らしき殊 教貸 十教
尚ミのれしくて伊野 袴
江戸中を勉化めいる和中 教 過橋
財て除ヶ今ふ 雲の内外
見えるなら ちと年号ぬ片持木 素后

神祇釈教雑

松風とやうくすかぬ荻ハ吉し 涼山
夫蓋西しくを弥よみ侍る
ゆゝハ於の世間きらびめ
巳の巳ハミなくけさやき 藝 雀郎
陸京すゝやうて内貝員の法
くハ門ゝうハ大黒きけし 弁蓋し 彦水
京内皆去用の入ふ見智して
子の春ミるを 呪の 卯遊
朝 法ゝ[illegible]ふ 庚子 足
[illegible]ふ 敬し 亀冥 芭我

猿蓑玖集　巻第七上

戀誹諧連歌

恋人踏きか跡ハ門の滝　梅郊
逢ハぬ恋切に怖て別まゝ　雅郊
腐ふとのうちかゝちゝ嚴さぬ京生
うきく上の清恋もなる恋　丶
一矢に射ふ面へ夜食出る
恋の仕上ケも親　親の世話

上巻

法士う火の煙ハ雲の上とゝ
及ぎぬ恋と思ふ恋歌　呉仙
恋やゝ津なし縁側へ出る
恋腐ふ矢しと戸も医の古く め　涼山
閑の酒を面てのゝ社会
似合ぬ恋をゆゝ訳れと　拙水
為ふ涼さろ髪ぬろう髪結
おゝんさいか恋もこんゆゝた大　湧　蛇田
和しとやゝてしもゆゝ出れ京風
行おもひ　行ふ踊るとの半　亀文

次祉子千年帰ると
風引くと年少詩歌のうらみて　亀文

思ふ人比の宗旨遠ひ絶頂に
詩求ふ人の状　仲人の状　丶

年々ぬ絶たてるも物の礼掛き　涼山
仲人の謝て牧のきず

ものとの湯〳〵やらいつも今比
若年かかる姫の嫁　孫　栗堂

そどけも姫さ上方の人
きてと射い沼て姫をとるかと謝ん　岩槻　牧之

上巻

相談ハ出来ぬよ成て言ハれ達
姫ハ来せ後ハ石なり　詩芝

きゝ〳〵し若い事ハ化粧より
見てくれとうの方ハ後ハ　蛇旧

婆へのかゞし赤まり抑法
姫ハ帰しけ年れ志こかし　伯幹

抑ちらよ振りよとめ祉
ちろ酔ま庇癒若の影と人え　貞知

下ろひちて張る　の　漬
痩さろ彩ひハ親の家ろ入れ

丶

世しきふれ流るたい
おふくろハよもやまとくのほくろぬき　合浦

ものゝ変しく智恵のつけ人も有拾子
さとくて陸る言号円士　一巴

物よろこびし家うまめなるゝ
俗係の寺へ結納の昆布かて　呉々

ものもまゝ中てもものの汗
結年ふたまりか変れ姫々　礼　吐風

指節かるれ法きやうも改り
号礼ものてきりの新ね　花城

当家みてやれハ学るとゝ後代
律義円士のをてぬ係絵　芝水

高新小奥と拙作仏医
係むきれ人のいやうる名と入て　来道

又てよい年もつ又ぬふうの老
物干小姫の細ユれ雪　竹鏡　涼山

仕出しゝ家根のこゝ中小三代
袴高小家ゝ母新の嫁ゝ　呉仙

紙衣ハ肥後名産あて
碁ハなゝハ嫁小茶と立させて　素竹

に伏て西津八重かゆくえ
夢のて垂と嫁の疲　癒　合浦
立居も楽なるのにん肥り肉
軒　陽の萩と成し里附　東道
伏もない津おもてろき十九九
雪ろろもしに奥井の重　素玉
帯の志まりもるい畧後
奥掘の佳先へ元よりへの　允升
かいれの絵ふ浪焙ちろと
墓目の矢元奥を飾る　苔雨

上、代九

皆月除なのの部れとと
七夕の函と若なる奥女中　其礼
足ほかゐる家の繊えう目ふうと
内心如夜又荒き　瓜吉　著存
津もあるやうふ焙墓灯しと
屠苦ふ成しれ悟東の仏　賀重
四つるも秋の日さしハ朝のを
はげ掘への髪乃麻しさ　瓠舟
砂の降ふ義の吸しぜ
佳屠の麻ぬふ書仏の夜うを　来道

仮初に仕切る屏風の片影より
老女のなびける肩見の乳　錦芝

此納涼所そうふ出て只二間
女の中に医師の大小　百童

紙ふくの条形の春れメれ
引やうも女中と見る書　凡巾　其虹

まる意な陽子のうる形二活
女う捉ろもい形　姥　栗堂

伯父は屋敷へ弟あるの口ろ
三法もきのめ浮ぬ女　中素　公曳

戯言のふうて見てれ　毎
和ろうか中に一下角　京　そんな　龍昇

江島屋りと見える　一むま
ろ〜孤馬より女さいうき　玉園

医師も和尚も鶏のなま
咎さうる蕎麦を女房の遣見て　公曳

表も霄に志める　吹降
女房ろ〜ぬ〜ろ紀若はうり　外遊

掛子細めに灯すきまく
女房ハ厄ろいよも撰きれ　津宜

何にてもかさぬ次第と申て
女房らうりと海をたく行　十数
方丈様のかろ義とさゝせる
書ハふと說服肉と積あぐと　其葉
汲たともよいあをさくくむ時
妻恋くくと語く　梅　清　素琴
落れと出のちはめの屋敷客
小夢ゆきけて喝ふまる妻　苔雨
撲恋か中を素面のたやにちち
京と通れ惹もくふ妻　百桂

は別荘なのちはめハ志まぬ　洒
英人の色乃ゐい金屏　亀文
婦沢の者も出ぬく動彩不
日本の英女乃相ハ小ぢくり　麻布　素月
次のゐ〳〵立て說ける花見場
客新英羅元ちゝ子の心　綿芝
舟ハ出来ても色紙ゐ「なゝ」
むちい髪ちりゐと甘一妾の服　蕎存
大道小方と撲めくるゐ
出〳〵妾とゐるとゐてゐる　一巴

太くなる家なりしも
妾はくさとをめ餃の艶　虎角

日和まくゆきは某大根の花
屋の玄書仮くるの妾はをて　卜人

兼彼もなれハちまく年の書
妾のちはふゆまを寒る京　風舎

寒ハ尺くをぬ出拾子の新
屋くもまをる妾れ故しを書　扇里

火も強くをぬ銀の多の
お妾の影ふ原を書の寒はを　玉圃